

2024年10月入学・2025年4月入学 地域デザイン研究科 試験問題

考古学（出題意図）

（芸術デザインコース 一般入試）

【出題意図】 考古資料に関する専門的な知識・理解を身に着けているかを問う。

- 中国考古学における主要な考古資料の事例を把握しているかどうかを問い、同時にその考古資料の特徴や要点を的確に説明することができるかを問う。
- 考古資料の器種、用途、時代・時期を正しく判断し、それを的確に説明できるかを問う。

【解答例】

図示された資料は、「大克鼎」と呼ばれる中国の西周晩期の青銅器である。1890年（清光緒16年）に陝西省宝鶏市扶風県扶風県法門鎮任村で出土し、現在は上海博物館に所蔵されている。銘文にこの青銅器の主が「膳夫克」という人物であると記され、同時に出土しやはり膳夫克の銘がある7点の鼎「小克鼎」と区別して、「大克鼎」と名付けられた。

器種は「鼎」で、鍋状の広口の胴部に棒状の三足が付き、口縁上には2つの環状の把手が左右対称の位置に付く。鼎は元来、肉や魚、穀類を調理する煮炊具であるが、商・周代には祭祀儀礼において肉を煮て神に供献する器として、礼器の中心をなす重要な器種であった。

大克鼎は、高さ93.1cm、口径75.6cm、重さ201.5kgに達する巨大な鼎である。口縁直下の紋様帯を変形獣面紋で、さらに同部中央から下半部の紋様帯を波曲紋で、それぞれ装飾する。三足の上部は扉棱（鱗状の装飾）をもつ獣面紋を飾る。胴部内面に290字の銘文があり、「克」という名の貴族によって西周の孝王の時に鑄造されたことや、周王から貴族への官職の冊命と賜物などが記され周王から貴族に対する賞賜に土地の賜与があったことを示す。その銘文は、西周中晩期における青銅器銘文の典型的な字体・書式であり、鑄造にあたって鑄型に銘文のマス目を引いたことを示すなど、この時代の青銅器銘文のあり方を表すことでも重要である。